キリスト教教育世界大会報告

片岡霊恵

多くの国際的大集会と同様に、この大会も長い歴史をもっている。第一回の大会が、一八八九年、ロンドンで開かれてから、今日まで七十年を経過しているうちに、その名称が、日曜学校大会から、キリスト教教育大会へと進展したことには大きな意義がある。すなわちキリスト教の宗教教育は、日曜学校の児童だけを対象とするのではなく、嬰児から老人に至るまで、人間の一生涯を通しておこなわれるという考えと、教育の場は、教会内のわくを越えて、家庭、学校、社会全体に及ぶ広さをもつものであるという理解に基づいている。また、今夏の第十四回大会が三十八年ぶりに日本において開催されたことも、キリスト教教育の新しい方向を指し示している。従来に比して、アジヤ、アフリカからの代員が非常に多く参加することが出来たし、欧米からも此の方面の指導者達が参集したことによって、今までとは異なった問題を多く含む異教社会における教育のあり方について、十分に考え語り合うことが出来たのである。

会議の方法にも特色がある。毎回増加する参加者達が、最も効果的に討議研究をすることが出来るように、一九五〇年のトロント大会の時から、インスティテュート(研究所)が大会に先立って開設された。そこでは学術的研究が徹底的におこなわれ、世界各国の指導者級の人々で構成される研究員が、その後の大会にひきつづき参加指導にあたる。それで、研究所の成果が代員全体に一応紹介されるというわけである。

今回のインスティテュートは、七月十九日から八月一日まで、西宮の聖和短大、神戸女学院において、六十余国、三百名近くの指導者達によって開かれた。次いで、会場は東京にうつり、一千五百の海外代員及び三千の国内代員による大会が、八月六日から十三日まで昼は青山学院、夜は東京都体育館に繰りひろげられた。私達大会の代員は、児童、青年、家庭及び成人、教職一般、信徒の五部のうち、どれかに登録し、更にその部内で、三十人程ずつの小グループに分かれて、討議をする仕組であった。ここでは、特に児童部の内容について報告する。

まず、児童部千五百人余の全体集会は、他の部と同様、朝九時の礼拝に始まる。各国語と日本語のコーラスによる祈禱と讃美歌で、礼拝が閉じられると、パウル・H・ヴィース博士の講演があり、各自に問題がなげかけられる。博士の講演は四回にわたり「キリスト教教育における聖書の役割」「キリスト教の交わりと生活における児童の養育」について話されたが、要は、子どもたちの成長の過程において、その宗教性はどのように伸びてゆくかを、よく観察、理解しなければならないこと、私たちおとなの指導者は、彼らをどのように助けてやるべきか、聖書は、彼らの生活の内にどのような役割をになっているであろうかなどの問題であった。殊に、長い間の論争のまとであった教課内容中心主義と、児童の生活経験中心主義の二極端に対して、この二つを越えたところの、第三の立場に立つべきことを明確にされた。

博士の講演は、大会の中核を形づくる理論的根拠を代表するということが出来よう。

さて、講演は十時半に終り、三十分休憩の後、十一時から十二時四十五分までは分団討議の時間である。児童部は日本人が多く、海外代員は数人ずつ各グループに入る

程度であったが、同じ顔が、同じ所で、五日間も話合うというのは、なかなか得がたい機会であっただけに、熱意ある努力が各グループにみられた。用語が英語と日本語であるため通訳に時間はかかったが、小人数であったから、中にはブロークンな英語で勇敢に話し出す人や、歌を合唱したり、祈りを共にしたりするグループも出てきて、なかなかなごやかな雰囲気がつくられていた。ディスカッションに馴れない私達も、海外代員の人達のかもし出す自由で開放的な、しかも自然な空気に包まれて、心の底を開いて話しあうことが出来たことは、何より大きな収獲であったと思う。

私は、三、四才児について考えるグループに参加したが、メンバーの構成は、教師、保母だけでなく、学生あり、主婦あり、牧師あり、老若男女とりまぜた色彩ゆたかな陣容であった。このようなグループ構成は、一見でたらめのように見えたし、はじめは少々、混乱を応じたけれども、私達の仕事の内容を深くほりさげてゆくばかりでなく、広い視野から見直そうとする新しいキリスト教教育の立場を明確にするのに役立ったのではないだろうか。

四十分のグループにおける討議内容をまとめることは出来なかったが、二三の大きな傾向について触れよう。第一に多くのグループで、児童の問題に関聯して、両親と家庭が大きくとりあげられた。児童の教育と家庭との連関はキリスト教に限ったことではないが、宗教的清操が培われる幼児期において、彼らの周囲のほとんど全部である家庭の果す役割は非常に大きい。ところが私達アジヤ諸国の子ども達は、幼少の頃から、親の信仰または無信仰とのたたかいに直面しなければならない場合がはるかに多いのである。このことは、どう考えたらよいか。また、あるグループでは、聖書物語と神学の問題、改心と信仰告白、幼児洗礼について、それぞれ活発なディスカッションがあった。その他、実際指導の問題、すなわち、カリキュラム、教材、リーダー養成などについても、各自の経験や、悩みを分かちあい、指導をいただいた。

これらの内容は、省略するが、つづめて云えば、此の大会は、私達保育者が日頃参加するような講習会、協議会と異なり、そのスケールの大きさにおいても、研修内容の豊かさにおいても、近来に稀なすばらしい集まりであったと言えよう。

夜のマス・ミーティング、各種のレセプション展示会などからも、学ぶところが多かったし、大集会において、各国代員が色とりどりの服装で行進したり、国際聖歌隊の美しい合唱や、アフリカ、パレスチナ、南大平洋の島々からの代表の興味ある話なども、忘れられない印象を残した。

終りに一つ、小さい出来事ではあるが私自分の強く感動したことを付記して、この報告を結びたいと思う。それは地域別集会の時のことである。私達、アジヤ、中近東地区の千人余の集りは全体協議会の形で開かれたが、日本人の一発言者が立って、戦争中、東南アジヤの人々に対してなされた残虐行為について心からのおわびのことばをのべた。その時、私の隣には、ビルマの婦人代員の方が座っておられたが、そのかたが思いがけなく、私に向かって、We can do anything in Christ「主イエスを信じる私達お互いは、どんなことでも出来るのですよ。」と言って、私の手をしっかり握ってくれたのである。私は穴があったら入りたい恥かしさを応じると同時に、感謝とよろこびに満ちあふれる思いであった。

お互いに自己の罪をみとめ、他をゆるしあう愛こそ、私達の信仰のあらわれであり、これこそ、次の時代の子どもたちに引きついでもらいたいわれらの遺産である。そして、このときの大会讃美歌の心は、そのまま、私達キリスト教教育にたずさわる者の決意となって、この世界大会は大きな成果を今後に約束して、終了したのである。

（平安女学院短大付属幼稚園長）